

## 新しい研究に踏み込む勇氣

日本大学 加藤 隆二



子供の頃、探検といえばなぜかアマゾンとっていた。鬱蒼としたジャングルで未知の生物が潜んでいて、河にはピラニアがいっぱい。そんなイメージが探検であり、探検家というものは知力と体力を駆使して勇氣を振り絞り、そんな未知の世界を切り拓いていく、というものと思っていた。最近、インターネットで世界は狭くなったようである。そこでネットでアマゾン探検について調べてみた。驚いたことにたくさんのアマゾンツアーが企画されている。1週間30万円程度でアマゾンが満喫できるとのこと、まるで学会出張のような気軽さである。内容は、こともあろうにピラニア釣り（釣れるのか?）、ジャングルハイク（え、ハイキング?）といった豪華(?)な内容である。憧れのアマゾンに行くことができることは本当に素晴らしい。でも世界が狭くなって、探検する場所などなくなったかのような気分させられるので、ちょっとさびしくもある。

人工雪の研究で知られる中谷宇吉郎は多くの秀逸な随筆を残している。そのなかに科学研究を、警視庁型とアマゾン型に分類して論じたものがあり、研究を行う者として非常に示唆に富んだ内容となっている（比較科学論、1959年）。岩波文庫の中谷宇吉郎随筆集にも収録されているのでお読みになった方も多いかと思う。その中で、研究のゴールがわかっていて、それを追い詰めていくタイプの研究を警視庁型と呼んでいる。開発目標がはっきりしている製品開発やプロジェクト研究がこれに対応すると思われる。一方、アマゾン型は好奇心ベースで始める研究であり、目標となるゴールはわからない、いやそもそもゴールがないかもしれない、という探索型の研究を指している。もちろんこれらは極端な場合についての表現であり、実際の研究はこの二つの融合であるとされている。大きな発

展を目に見える形にするためには警視庁型の研究が重要であり、どうしても結果を求める世間にはこのタイプの研究だけが重要であると思われる。しかし、新しい研究の芽を育て、新しい研究分野を創造する、つまり追いかける相手を探すためにはアマゾン型の研究が必要であることを伝えたかったのだと思う。

最近、科学研究の在り方について、いろいろところで活発な議論がされている。大きな研究プロジェクトが数多く行われるようになり、国内の研究環境は、少なくとも平均としては大きく改善され、30年前とは隔世の感がある。しかしよく言われるように、研究費の獲得のため、ゴールを目指すプロジェクト研究だけを続けていいのか、つまり警視庁型研究に偏りすぎではないか、ということがしばしば指摘されているように思う。上述の中谷の随筆が書かれてから50年以上がたっている。しかし、その内容は現在の研究状況を考えるうえでも重要であることが実感されると思う。つまり研究活動の普遍的な本質を非常にうまく指摘しているのだろう。自分の好奇心をもとに好きな分野の研究をするアマゾン型研究。なんとなく研究活動の本道であって理想的な研究のような気もする。でも、「そんな浮世離れたことで研究費が稼げるか」と言われることもありそうに思う。また、「あー、そんな風にじっくり研究してみたい」という声も聞こえてきそうである。でもどうしてそんな憧れのアマゾン型研究に取り組めないのだろうか、ちょっと考えてみたい。

研究費がなければ研究ができない、たしかに極論すればそれは事実であろう。どんなレベルの研究でも研究費は必要だ。昨今は外部研究費をとってることが前提なので、獲得した研究プロジェクトを警視庁的研究として実行するしかない、という言い分には重みがある。でも、追いかける対象は誰が見つけてくるだろう。やはり誰かがアマゾンへ分け入っていく必要があるだろう。現実的にはその道は閉ざされつつあるのかもしれないけれども。

上述のように最近は本物のアマゾン旅行も随分と簡単になってきている。そこで同じようにアマゾン型研究も簡単にできないものか。企画されたツアーのように、研究費を投入してアマゾンに連れて行ってもらってピラニア釣りを楽しむ。こうやってアマゾンを探検した（気持ち）になることはできないか。計画されたアマゾン探検、と言えるかもしれない。挑戦的な課題で研究費を少額でも獲得して、新しい研究を始めることなどがこれに対応するかもしれない。何しろまずアマゾンに行ってみる。これは悪くない。なにしろ憧れのアマゾンに降り立つことはできるのだから。実際に探検の現場に行くことは、探検を始めるためにはとても大事なことであると思う。ある意味でトレーニングにもなり、力をつける良い機会であることは間違いない。そう、あとはツアーをキャンセルしてアマゾンの

密林に踏み込むだけだ。

月並みではあるが、アマゾンの密林に踏み込むにはちょっとした勇気が必要である。探検家というものはこれまでの生活を捨てて、これから何が起こるのかわからない道に入って行くのだから当然だ。研究するには勇気が必要とされる。こんな当たり前のことを実感することは少なくなってきたのかもしれない。もしかしたら日々の生活が意外と快適なためかもしれない。そう思うと、結局、憧れのアマゾン型研究ができるかどうか、ということはどれくらい勇気を持てるか、ということなのだろう。

自分は臆病者だけれどもアマゾン探検にどうしても憧れてしまう。アマゾン探検に行ける日を夢見てトレーニングを続けて、もう少しだけ勇気を持ちたいものである。